

帽子屋の百の帽子の秋の暮

藤田湘子

湘子先生は帽子が好きであった。私が初めて会った十五歳の先生は、すでに帽子を着用されていた。

それ以後、句会や大会、吟行会でお会いすると必ず鞆と帽子がトレードマークになっていた。いつ頃から着用されるようになったか聞きそびれたが、頭髪の量と少なからず関係があつたのでは無いかと思つている。

好みは中折れ帽のようであつたが、大町の句碑除幕式では小鳥の羽の付いたチロリアン帽も被られていた。

「帽子屋の百の帽子」からは銀座のトラヤ帽子店を想像した。実際、棚に並ぶ帽子は百以上であろうが、数の多い例えである。あれこれ試着し、選ぶ愉しみ。帽子好きでないと一寸理解できない至福の時間かもしれない。

1984年 (S59.09.18作) 第七句集『去来の花』 鑑賞・轍郁摩